


在外研究員研究報告書

2019年 12月 17日 受付

所 属	心理学部	氏 名	石川 信一		
職 名	教授				
研究課題名	認知行動療法におけるセッション内相互作用に関する国際比較研究				
研究期間	2018 年 4 月 1 日 ~ 2019 年 3 月 31 日				
滞在期間 ・滞在地 研究調査先	滞在期間	滞 在 地	研究・調査先		
	2018. 4. 1~2019. 3. 31 (12カ月)	シドニー (オーストラリア)	Macquarie University Department of Psychology, Center for Emotional Health		
研 究 費	287.8	万円	研究成果の概要	別記 4,000字程度	
発    表	題 目 名	発表学術誌名Vol. No.		発行年月日	
	準備中				
	著 書 名	発 行 所 名		発行年月日	
	なし				
	演 題	講 演 学 会 名		講演年月日	
準備中					

## 研究成果概要

本在外研究の目的は、子どもを対象にした認知行動療法（CBT）におけるセッション内相互作用に関する国際比較研究を行うことであった。具体的には、日本とオーストラリアにおけるCBTセッションの様子を録画した動画を用いて、行動評定の基準となる行動評定システムを開発し、それに基づき両国のセラピスト・クライアント間の相互作用の分析を行い、両国の比較を行った。

現在の臨床心理学では、実証に基づく心理社会的技法における、①普及（dissemination）と②文化的適応（cultural adaptation）が大きな課題となっている（Kazdin, 2008）。①普及の課題を解決するために、筆者らは「児童青年の不安・抑うつに対する認知行動療法の有効性（基盤C）」において、非英語圏アジア諸国における初めてのランダム化比較試験（RCT）を行った。（UMIN試験ID：000008724）。本RCTでは、51名の不安症を示す子どもたちをランダムに、CBT群と待機統制（WLC）群に割り付け、8回からなるプログラムの効果を検証した。主要効果指標とした臨床心理士によるブラインド面接結果、CBT群では50%が主たる不安症状から改善し、WLC群では12%であった。以上の結果は、欧米諸国の効果研究の成果と匹敵するものであり、洋の東西を問わず、子どもの不安症に対してはCBTが有益であることが示唆された。ちなみに、このRCTによる研究成果は、在外研究中に論文化され国際雑誌に掲載されることとなった（Ishikawa, Kikuta, Sakai, Mitamura, Motomura, & Hudson, 2019）。以上の研究成果に基づき、本在外研究においては、上記のRCTで得られたCBTプログラムのデータを活用し、CBTセッション内のセラピスト・クライアント間の相互作用について国際比較研究を行い、②文化的適応の課題についての有益な示唆を得ることを目的とした。なお、本研究の実施に当たっては、国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）の助成を受けた（16KK0090）。

まず、国際比較を可能とする行動評定システムを開発するために、オーストラリアでのCBTセッションを観察することとした。筆者は上記RCTのセラピストを務めていたため、日本のCBTセッションの特徴は把握していた。その臨床経験と、オーストラリアにおけるCBTセッションの特徴を比較することで、国際比較に有用な行動評定システムの開発が可能となると考えられた。そのためには、守秘義務のあるCBTセッションのビデオにアクセスする資格を得る必要があった。前段階として、筆者はMacquarie Universityに設置されたCenter for Emotional Healthの客員教授として正式に認定されることとなった。次に、Center for Emotional Healthで実施されているCBTプログラムであるCool Kidsプログラムの研修を受けることとなった。Cool Kidsプログラムは、大規模なRCT（Hudson, Rapee, Deveney, Schniering, Lyneham, & Bopopoulos, 2009）においてその有効性が確認されている世界的に普及したプログラムの一つである。以上のトレーニングを完遂し、Cool Kidsプログラムの概要を把握したうえで、CBTプログラムの実際を観察し、日豪の比較の上で重要となる要素を拾い上げていくこととなった。その後、共同研究者であるMacquarie UniversityのJennifer Hudson教授との協議のうえで、Cross-cultural Behavioural Observation System（C-BOS; Ishikawa & Hudson, 2019）の開発を行った。C-BOSは親子の行動を評定する既存のシステム（Family Observation Schedule-VI; FOS, Pasalich & Dadds, 2009）を基盤に開発され、子どものCBTセッションにおける子ども、親、セラピストの行動を評定することができる世界初の行動評定システムである。

続いて、このC-BOSの暫定版を用いて、評定者トレーニングを行った。評定者は現地において、CBTの臨床経験のある大学院生以上のセラピストを研究アシスタント（RA）として雇用することとなった。この過程において、同志社大学のMacquarie Universityとの間で研究協定を結ぶ必要が出てきたため、筆者は同志社大学の担当部局と協議を重ね、途中帰国をしながら詳細を詰めながら、最終的に「A Cross-cultural Comparison of Interactions between Therapists and Children within Cognitive Behavioural Therapy and as described in the Project Proposal at Annexure 1.」として両大学の研究協定が締結された。この協定に基づき、国際共同研究加速基金の予算を用いてMacquarie Universityに所属するRA 3名の雇用が可能となり、結果として研究が進むこととなった。RAに対する半日の行動評定トレーニングを行った後、実際のケースについて暫定的な行動評定を行いC-BOSの改定を行った。同時に、日本においても博士課程（後期課程）の学生をアルバイトとして雇用して、同様の手続きを行った。合計3回の修正を経て、最終的にC-BOSの完成版が作成された。

C-BOSは、子どものCBTにおける、子ども、親、セラピストのやり取りを評定するために準備された4つの領域とその下位尺度から構成される。第一の領域は、子どものCBTセッションに対する準備性（Readiness）を測定する領域である。準備性は、開始（Initiation）と潜時（Latency）の下位尺度から構成される。開始は最初のセッションで子どもが自分の不安刺激や場面に言及できるか否かを測定し、潜時はセラピストから質問されたときに、子どもが自分の不安刺激や場面に答えることができるまでの正確な時間から測定される。第二の領域は、ダイナミクス（Dynamics）であり、インターバル

行動評定に基づいた2つの下位尺度から構成される。主導権 (Initiative) は、そのセッションにおける個人 (子、親、セラピスト) の話す割合 (つまり、セッション内の発話のパーセンテージ) を表し、流暢性 (Fluency) は、CBTセッションの流暢さを代表する行動の頻度を測定している。具体的には、笑い (Laughing) と沈黙 (Silence) によって評定される。以上の測定から、CBTセッション内の三者の力動を数値化する試みを行っている。第三の領域である手助け (Accommodation) は、親の子どもへのかかわりに焦点を当てており、3つの下位尺度から構成される。会話の方向性と確認 (Direction to talk and Reassurance) では、セラピストから子どもへの質問に対して、子どもが親の方を見るという反応が観察される行動をカウントする。代弁 (Speak for) では、セラピストの子どもへの質問に対して、親がその質問に代わりに答える行動をカウントする。再度に、横やり (Interruption) は、親はどのくらいの頻度で子どもとセラピストとの会話に横やりをいれるか、について測定する下位尺度であり、セッション内のセラピストと子どもの会話、もしくは3名で共有されている会話であっても親が言葉をどちらかの言葉の上から言葉を重ねるといった行動でカウントされる。最後に、第四の領域である志向性 (Orientation) は、セラピストの行動に焦点を当てており、2つの下位尺度が準備されている。まず、遠回り (Detouring) は、セッションが開始された時間から、セラピストがCBTセッションの核となる話題を持ち出すまでの時間の差を測定する。準備性と対応する形でセラピストが中心的話題を実施するまでにどの程度時間をかける必要があるかを反映していると考えられる。最後に、表現 (Expression) は、セッション内で用いられた情緒状態を表現する言葉を抽出し、その頻度を測定している。この下位尺度は、感情表現がどのくらい直接的に両国で行われているか、あるいはあいまいな表現がどの程度用いられているかを明らかにするために測定される。

そして、完成版のC-BOSを用いて、実際に日豪の国際比較が行われた。まず、本研究目的に合致した比較データの抽出のため、両国のRCT (Hudson et al., 2009; Ishikawa et al., 2019) に含まれた参加者の様子を録画したビデオの中から、子ども、親、セラピストの3名がそろっているビデオを選択し、その中でも開始から20分間3名が半分以上の時間が入室しているものを抽出した。さらに、オーストラリアにおいては、日本との比較のため、デモグラフィックデータにおいてアジア系を選択していない対象者のみを分析に含めることとした。以上の手続きを経て、日本のデータ30名、オーストラリアのデータ30名が分析対象となった。上記のトレーニングを受けた、各国の3名のRAがC-BOSに基づく評定を独立で行い、一部については評定者間一致率を産出し、基準を満たしている下位尺度について比較を行った。帰国までに仮のデータ分析を実施し、結果報告を行ったが、現在まで詳細な分析を継続している。最終的な分析結果が整い次第、論文や学会にて発表する予定としている。

在外研究期間中には、10月にブリスベンで開催されたオーストラリア認知行動療法学会 (Australian Association for Cognitive Behaviour Therapy: AACBT) にて口頭発表を行い、オーストラリア内の専門家との交流を行った。また、University of New South Wales, Griffith University, Flinders Universityに訪問し、研究発表を行った。その中で、Flinders UniversityのJunwen Chen先生から執筆依頼を受ける機会を得たため、日本の認知行動療法の現状と課題についてまとめた展望論文を執筆した (Ishikawa et al., in press)。本論文はAustralian Psychologistに印刷中である。さらに、AACBTでの発表をベースに「Developing the Universal Unified Prevention Program for Diverse Disorders for School-aged Children」という論文を執筆し、Child and Adolescent Psychiatry and Mental Healthに掲載されることになった。

さらに、在外研究機関を経て培われたMacquarie Universityの研究者との連携関係に基づき、帰国後の発展として新たな研究計画の立案も行われた。Macquarie University のMelissa Norberg准教授と、在外期間中にMacquarie University に招聘されたFlorida State UniversityのBrad N. Schmidt教授らと共同で、社交不安の国際比較文化研究を立ち上げた。そして、2019年12月時点までに、アメリカ、オーストラリア、日本でのデータ収集を行っている。また、Jennifer Hudson教授、Ronald Rapee教授と共同し、本在外研究を基盤とした新たな研究計画を立案した。この計画は、「文化適応型認知行動療法とプログラム採用型認知行動療法の比較検討」として、科研費基盤Bに採択された。帰国後の2019年から5年間にわたって多施設共同RCTが実施される予定となっている。

以上のように、本在外研究においては、C-BOSというCBTセッションの実際のやり取りを測定できる世界初の行動評定尺度が開発され、それに基づき日本とオーストラリアの実証的なデータが収集された。このデータは、心理療法の文化的適応についての実証的データを提供するという意味で、世界的にも価値あるものになることが期待される。この成果は、今後、国際誌や国際学会で成果が報告される予定である。さらに、この間に確立されたオーストラリアの研究者との連携ネットワークを活かして、新たな研究計画が立案され、データの習得や研究費の獲得という成果を収めている。以上の点から、本在外研究は非常に有益なものであり、今後の研究活動を推進していく大きな契機となった

といえる。

関連発表論文

- Ishikawa, S., Junwen, C., Fujisawa, D., & Tanaka, T. (in press). The development, progress, and current status of cognitive behaviour therapy in Japan. *Australian Psychologist*.
- Ishikawa, S., Kikuta, K., Sakai, M., Mitamura, T., Motomura, N., & Hudson, J. L. (2019). A randomized controlled trial of a bidirectional cultural adaptation of cognitive behavior therapy for children and adolescents with anxiety disorders. *Behavior research and Therapy*, 120, 103432. <https://doi.org/10.1016/j.brat.2019.103432>.
- Ishikawa, S., Kishida, K., Oka, T., Saito, A., Shimotsu, S., Watanabe, N., Sasamori, H., & Kamio, Y. (2019). Developing the Universal Unified Prevention Program for Diverse Disorders for School-aged Children. *Child and Adolescent Psychiatry and Mental Health*, 13, 44.